

# 多自然型工法の実態・技術者の目



岐阜分室 室長 大河内 八郎

多自然型工法が叫ばれてから往く数年の歳月が過ぎ、全国各地に近自然・多自然・自然共生等いろいろな工法が実施され、川は少しずつ、コンクリートの白い護岸から、ブロックから変わりつつある今日この頃である。土木技術者も頭を変えつつある、この時果たして地に着いた技術を駆使しているだろうか？イヤまだまだ変わっていない。国、県、市の土木技術者は現場を見て工法の選定から施工管理その後のあるべき姿を見極めた設計思想を持っているだろうか？はなはだ疑問である。近自然・多自然・自然共生工法はなるほど採用しているが、現場とマッチしてない、違和感がある。何を目的にこの工法を採用し、将来の姿を描いたものか、解らない施設が目についた。今回7月1日～2日にかけて土木、魚類、植物、ビオトープの先生方と多自然型工法の施設を見てまわり、気づいたことを報告します。

技術者よ！ 川を見る。

技術者よ！ 広くまわりを見る。

技術者よ！ 川の生い立ちを知ろう。

何で、どうして、ここに、この工法が妥当なの？と思う施設をいくつも見てきました。河床低下の生ずる河川、流路蛇行のある河川、貴重種・危惧種のある区域等々疑問のある工法採用され、各地で施工されています。この疑問を持つ人もかなりいると思います。

川を見てない・まわりを気にしていない・生い立ちを知らない、時間に追われ、地元要望に振り回され、箱庭護岸を作っている。技術者よ、現場を見よう、川は生きている、動植物は変わる、環境は変わる、人は変わる、自分の目で観、将来の姿を魅、今この工法を診る。

技術者よ、後輩に誇れる施設を創ろうではありませんか！



写真 - 1 都市部における環境整備（水質Dランクの汚い河川）



写真 - 2 隙間のない巨石護岸（水生生物も住めない）



写真 - 3 田園地域の植生護岸とフトンカゴ（水枯れ・埋没表流水）